

ことばとジェンダー研究—私の視点

遠藤 織枝

1. はじめに

日本語の研究者が日本語をジェンダー——社会的性差——の視点で考えるようになってから、まだ日が浅い。日本語の性差の研究は「婦人語」の研究として戦前から行われてきたが、その研究は、性による言語の違いの研究にとどまるものであった。今回は、そうした研究から、社会的に作られた性差と言語の研究への道筋をたどることにする。同時に研究方法の変化、研究対象の広がり女性間の連携についても述べる。さらに今後の課題について考えてみたい。

2. 日本語の性差

日本語には「女性語」という、女性特有のことばがあり、日本語は性差が大きい言語であると言われてきた。

しかしながらこうした性差は、日本語の歴史の中にもともとあったことがらではない。遠藤（1997）は、日本の女性のことばの歴史を以下のように概観している。奈良時代には顕著に見られなかった性差が、平安時代に、漢字は男性、平仮名は女性という文字遣いの差として現れ、鎌倉時代には男女のことば観に差が出てくる。室町時代の初期には女房詞が生まれ、江戸時代には女性のことばの手本とされる。

明治期学校教育の普及とともに女房詞の伝統をうけて形成された「女性語」が全国的に取り入れられ、日本語の性差が強化固定化されていく。

3. 「女房詞」の研究

日本語の性差の研究は1920年代後半、菊澤季生（1900-1985）が「女房詞」の研究で嚆矢を切った。菊澤（1929：66-75）では、「婦人語」の代表として「女房詞」を取り上げ、この女房詞を「女らしさをよく發揮して甚だ優美なもの」として、その「女らしさ」とは、「1. 丁寧な言葉遣い、2. 綺麗な上品な言葉、3. 婉曲な言い方、4. 漢語を避けること」であると論じた。さらに菊澤は国語位相論を提唱し、女房詞は忌詞・商人語・通人語・遊女語・武士詞など特殊な場面で使われる位相語のひとつであるとした。

真下三郎（1907-2007）は、真下（1942：179-186）で、女房詞の「もじ言葉」をとりあげ、「婉曲に回りくどい表現をとり易い」のは「女性一般に通ずる言語心理的な現象である」と見てよい」と言い、また、「女性は本能的に、粗末下品な表現を避け、上品な言葉をえらぶ」と論じた。

4. ことばのジェンダーの気づき

文学者であり日本共産党中央委員であったタカクラテル（1891-1986）は、タカクラ（1947：3-5）で、女房詞を「室町時代の貴族の女たちはふつうのことばは卑しいものと考えて、自身たちだけのとくべつのことばを考えだした」ものとした。さらに、日本語の性差について「女というものの地位が、政治的にも、社会的にも、家庭的にも同じように封建的な差別をつけられていたから、いつまでも女と男のことばがちがわなければならなかつた」とのべ、まさにジェンダーの視点で女性のことばを見ていた。

5. 壽岳章子の登場

壽岳章子（1924-2005）は、50年代に国語学の研究生活に入り、抄物——「毛詩抄」「史記抄」など、室町時代から江戸時代にかけて、僧侶儒学者などが、漢籍を平易に講釈した書物の総称——の研究を進める一方で、名前の研究、流行歌の研究など日常生活の中の女性のことばに関する研究を始めてい

た。壽岳（1979）では、「日本語のありようと女の在りようとの相関」を追及すると述べている。このような視点で女性のことばが研究対象となるのは、はじめてであった。前掲書Ⅰ部「女らしさとことば」では古典から現代語までの女性のことばが「女らしさ」の強制であり束縛であると論じている。

6. 井出祥子の観点

同じ時期、井出祥子は井出（1979：55-64）で「日本語における女性語の特徴は、女性は男性よりも地位が低く、弱く、つまらない部外者的な存在であるが、一方女性は優雅で気品をもった存在であるという考えを反映しているものとして考えることができる。女性は差別されて、低い地位に押しやられていると考える人々は、このような特徴を否定的に、女性を不利な立場に追い込むものとしてとらえるだろう。他方、女性は俗世間とは異なった生活の側面を楽しむことのできる恵まれた存在であると考えられる人々は、このような女性語の特徴を、女性のあり方を守るものとして肯定的なものともみなすであろう」と述べている。

女性語を否定的肯定的の両面から見ているが、井出（1991）では「女が女でありますという身分証明のためにきれいな美化語を使う」と述べて、女性の女性語使用をポジティブにとらえている。

7. 現代日本語研究会

1977年、遠藤織枝は仲間とともに現代日本語研究会を発足させた。1980年、研究誌『ことば』を発刊した。遠藤はこの号で「女性をあらわすことば」を載せ、日本語の中で、女性がどう位置づけられているかを国語辞典の中の女性に関する言葉の扱いを通して考察した。翌年、同研究会は、国語辞典の中の女性を多角的に総合的に研究するために共同研究を開始した。その成果を『国語辞典にみる女性差別』（1985）として報告した。

遠藤らは、従来の文法書や概説書で言われてきた「女性専用語」というものと自らのことばのギャップに、実際の日本人男女はどういう言葉を使って

いるかを解明したいと考えた。その研究結果を現代日本語研究会 (1997)、現代日本語研究会 (2002)、さらに遠藤他編 (2016) として報告した。

遠藤 (1998 : 187-189) では「女性語」という術語が実態を表していないことと、こうした性とことばをむすびつけることで、性差が再生産されることを理由に、この語の使用に疑義を呈している。これは昨今大きな問題となっている LGBT=性的少数者の言語を考えると、さらに現実味を帯びてきている。

8. 研究の進め方と女性の連携

大学や研究機関に属していなかった女性たちが研究を続けられたのは、独自の研究会をもっていたからであった。そこでは、たびたび共同研究を組織して、数十人を対象とする談話資料作成など個人ではできない大型のプロジェクトも遂行できた。また、その研究成果を紹介してくれる女性のジャーナリストがいて、著書として刊行することもできた。こうした女性の連携が、従来の男性中心の研究とは違う新しい方法を切り開くことができた。

9. 今後の課題

21世紀に入ってことばの性差は縮まってきた。その一方で、国連の示す日本のジェンダーギャップ指数は114位と極めて不名誉な実情である。日本社会の意識構造の多くの部分で戦前の家父長制社会の意識が根強く残っている。若い夫たちが妻を「嫁」と言い、妻たちもそれを受容している現実をはじめとして、まだまだジェンダーとことばの研究材料は、残念ながら、豊富に存在している。

[参考文献]

- 井出祥子 (1979) 『女のことば 男のことば』, 日経通信社.
_____ (1991) 「ことばの研究と女性」, 『国語学解釈と鑑賞』至文堂 7月号, p. 17.
遠藤織枝 (1980) 「女性を表すことば」, 『ことば』 1号, 現代日本語研究会, pp. 19-54.
_____ (1997) 『女のことばの文化史』, 学陽書房.

- _____ (1998) 『気になります、この「ことば』』, 小学館.
- _____ 他 (編) (2016) 『談話資料 日常生活のことば』, ひつじ書房.
- 菊澤季生 (1929) 「婦人の言葉の特徴に就て」, 『国語教育』 3月号, 国語研究会, 目黒書店, pp. 66-75.
- 現代日本語研究会 (1997) 『女性のことば 職場編』, ひつじ書房.
- 現代日本語研究会 (2002) 『男性のことば 職場編』, ひつじ書房.
- ことばと女を考える会 (1985) 『国語辞典にみる女性差別』, 三一書房.
- 壽岳章子 (1979) 『日本語と女』, 岩波書店.
- タカクラテル (1947) 「女のことば」, 『女性改造』 1月号, 改造社, pp. 2-7.
- 真下三郎 (1942) 「婦人語の生命」, 『現代日本語の研究』, 国語学振興会編, 白水社, pp. 169-196.
- _____ (1948) 『婦人語の研究』, 東亜出版社.
- _____ (1967) 『女性語辞典』, 東京堂出版.

(えんどう おりえ・元文教大学大学院教授)